

《 巻 頭 言 》

巻 頭 言

総合科学分析支援センター長 佐藤 勝

本年4月に「総合科学分析支援センター」が設立され、7月に開所式が挙行されて順調に推移することができましたことに対して、学長はじめ関係教職員皆様方のご尽力に心より感謝申し上げます。

「総合科学分析支援センター」の設立については、一昨年の平成13年の秋に埼玉大学が当番校となって大宮ソニックシティで開催された「第5回国立大学機器・分析センター会議」の席上で、来賓で出席された文部科学省の研究振興局学術機関課の小山晴巳課長補佐が、今後の科学行政において研究支援体制の充実が如何に重要であるかについて述べられたことに端を發しています。当時分析センター長の任にあった吉岡教授が、埼玉大学においても研究支援体制の充実が急務と判断され、学長に働きかけ「総合科学分析支援センター」の設立を目指したワーキンググループが設置されました。その委員会で具体案が検討され、昨年平成14年4月に平成15年度の分析センターの概算要求として、分析センターを核に既存の学内共同利用施設「アイソトープ共同利用施設」と「動物飼育室」とを統合し、生命科学の教育・研究をも支援できる「総合科学分析支援センター」の新設が申請されました。幸いにも、大学本部および文部科学省のご理解を得て、本年度めでたく「総合科学分析支援センター」が発足する運びとなりました。皆様と共に「総合科学分析支援センター」の新設を心から喜びたいと思います。

「総合科学分析支援センター」は「生命科学分析分野」と「機器分析分野」の2部門より構成され、教官5名、技官3名の体制となっています。「生命科学分析分野」は、放射性同位元素を利用する実験や遺伝子を使用する実験を中心とした教育・研究を支援することを目的にし、学内に対してはこれらの実験についての知識普及や実験技術の向上を図ると共に、学外に対しても組み換えDNA技術やバイオインフォマティクスに関する啓蒙活動も行う予定です。「機器分析分野」は、高性能な大型分析機器を集中管理して分子の構造や物質の性質・構造等の分析を行い、新物質の創生や新機能の発見など学内外における今日の科学技術の発展に寄与することを目的にしています。

このように、「総合科学分析支援センター」は自然科学関連分野の教育・研究支援体制を総合的・有機的に結びつけて、より効果的な相互連携体制を構築することによって埼玉大学の教育・研究の一層の発展を図るものです。本センターの設置により、これまで手薄であった生命科学分野の学際的・複合的な研究支援体制が可能になると共に、化学実験・物理実験・生命化学実験において大型機器等の一元管理による効率的な利用や、より綿密な教育訓練、より一層の安全性の確保などが可能になります。加えて、機器分析を統合することにより、学部・学科を越えた研究グループが密接な関係を保ちながら研究支援や共同研究を行うことが可能になることから、学際的・総合的な研究がよりスムーズに推進できることになり、今後の埼玉大学の研究ポテンシャルを高め、新たな研究の萌芽を促す効果を果たすものと考えられます。

また、地域のニーズに答えるための新たな研究の推進にもつながるものです。特に、埼玉県と埼玉大学が中心となって進められる地域結集型産学共同研究事業(通称「埼玉バイオ」)が本年1月から発足しましたので、埼玉大学がこの事業を全面的に支援して本格的な研究実験を担当していく上で、将来総合科学分析支援センターの生命科学分野の果たす役割は極めて重要になって行くものと考えられます。

「総合科学分析支援センター」の目指すものは、上で述べましたようにハイレベルで多岐にわたっています。一方で現状を省みると、多くの問題を抱える「機器分析分野」と独自の建屋を持たない「生命科学

分析分野」とが問題解決のために悪戦苦闘しております。「生命科学分析分野」が新たな事業を展開するためには独自の建屋の建設が急務であり、「機器分析分野」のスムーズな運営も今後の課題として残されています。これらの諸問題の解決には、ひとえに学内教職員のご支援・ご協力が欠かせません。「総合科学分析支援センター」を強力な学内の研究支援センターとして育て発展させていくために、今後とも分析センターのときと同様変わらぬご支援・ご協力をよろしくお願い致します。